

act 42

art, culture, tradition

[発行] 札幌市教育文化会館
アクト第42号

November 2022

演劇のプロデュースと制作



演劇のプロデュースと制作

演劇作品の創作と上演には、それを可能にする資金面や環境面の整備が欠かせません。必要とされる一連の実務は劇団員や専門スタッフが担い、公演規模が大きくなるにつれ分業化されますが、札幌の場合は一通りの作業を少人数で担うケースが多いようです。今回はそういった実務面での整備を担う、「プロデューサー」や「制作」とクレジットされる人たちの仕事をご紹介します。



Producer
Komuro Akiko

創作と並走しながら、資金面や集客等さまざまな心配事を取り除いていき、
つくり手が安心して創作に専念できる環境づくりをする。

舞台写真（「葉桜とセレナーデ」「私の名前は、山田タロス。」「沼部、陸へ上がる」）：原田直樹（n-foto）



舞台写真（「アフリンと魔法のランプ」「北緯43°のソフ」）：烈々風 玉葱吹る 夏至白夜 沁みる挽歌に 囀るひよこ（高橋亮巳）

どう収益を上げながらそれを成立させるか考える。

芸術監督から出される、札幌でどんな演劇を提示していくのかという創造面での立案に対して、

Producer
Kimura Noriko

演劇のプロデュースと制作、 守るべき仕事の核とは？

—最初にお二人がこの仕事をするようになった経緯から教えてください。

木村 私は演劇鑑賞会で働いたのが演劇に携わった最初で、そこを辞めた後は劇団の制作などをしていて、30代前半の97年に韓国の劇団に知り合いがいたこともあって韓国に語学留学し、短期の予定だったのが結局卒業して、韓国で演劇関係の仕事をするようになりました。2000年くらいから日韓の交流事業が始まったので、その仕事をずっとさせて頂いて、札幌座の韓国公演のサポートや、北海道文化財団の光州との交流事業もお手伝いしていました。2014年に札幌に戻り、そこからは演劇財団で働いて今に至ります。

小室 私は大学時代に演劇を始めて、卒業後は編集やライターの仕事をしてしばらく札幌で演劇を続け、27歳のときに東京に出てからは某劇団の公演パンフレットの製作や、その役者さんによる別ユニットの制作をしていました。2006年に、小劇場演劇の制作者を支援するサイト「fringe」が主催した「Producers meet Producers (PmP) 2006 地域の制作者のための創造啓発ツアー」という2泊3日の勉強会に事務局員として参加したことがきっかけで、札幌に戻って劇場の運営をしているNPOで働き、そこで公演企画もずいぶんやりました。2014年からはフリーランスになって今に至ります。

—「演劇プロデューサー」をWEBで検索すると「演目の方向性やターゲットなど企画立案を担い、お金の責任を取る」というような紹介のされ方をしているのですが、お二人の場合もそうですか？

木村 その地域の状況によってプロデューサーのあり方は違うので、一つの定義が全てのプロデューサーに当てはまるとは思いません。私だと「北海道における演劇の振興」という北海道演劇財団のミッションに沿った事業のあり方を、プロデューサーとして考える形です。今お話できるのは前芸術監督の齋藤歩との話になりますが、齋藤はプロデュース能力も経営能力もある人で、彼が立案して

くれるものに対してどう収益を上げながらそれを成立させるか裏付けしていく、いわゆる制作に近いことが私の仕事です。今後は、この4月に芸術監督に就任した清水友陽との協働のシステムを作っているところです。

小室 私は一人でやっているの、企画に関してはこういう人たちが一緒にやったら面白いんじゃないかなとか、この本をやってみたくらいからこの人はどうかという感じで考えて声をかける感じです。(プロデュースしている)のと☆えれきは、少ない人数でもきちんと良いものをつくって、お客さんも入れられるような仕組みにしていきたいと考えてやっています。私はPmPをきっかけにしているので、道外の人とつながりがあることも自分の強みだと思っていて、道外公演を行ったり、道外劇団の作品を札幌で紹介したりということも考えています。

—この仕事をする上で欠かせない資質は何ですか？

木村 好奇心でしょうか。少し話が戻りますが、私は韓国にいる頃から「コーディネーター」と呼ばれる方がしっくりきて、とは言えコーディネーターは経済的な部分までは負担しないので、対外的にはプロデューサーという肩書きをつけられることが多かったんです。でもプロデューサーが何をやる人なのかよくわからなくて、東京の年配のプロデューサーに質問したことがあります。彼が言ったのは「社会を読んで、演劇やダンスを社会と結ぶことが大事で、プロデューサーの資質にはそういうことが必要じゃないか」と。それがすごく印象的でした。社会を読むというのは、社会情勢だけでなく、例えば札幌の演劇やダンスの状況から、こういうことをしたらもっとこの地域の演劇やダンスが違う立ち上がり方をするんじゃないかと読んで「この企画をやってみよう」という発想ができること。そういう発想を可能にする好奇心の強さが大事だと思います。

小室 直感力や閃きは大事なかなと思います。あとは決断力と、決めたことは絶対に自分の中でブレない

木村典子

KIMURA NORIKO



北海道演劇財団プロデューサー。97年韓国に語学留学後、劇団制作者として仕事をしながら、日韓交流コーディネーター、翻訳家、通訳として活動。帰国後、公益財団法人北海道演劇財団勤務。

小室明子

KOMURO AKIKO



札幌生まれ札幌育ち。雑誌編集者を経て演劇制作の道に。2014年よりラボチを旗揚げ、演劇公演のプロデュースのほか演劇制作に関わる様々な仕事を手掛ける。奥田民生が好きです。

ようにして進める胆力も必要とされると思います。

—大変なことはなんですか？

木村 舞台を作るのは、人と関わることです。人と関われば関わるほど、自分が混沌とした状況になるのが毎回のことで、それがなくなるとまたものは生まれないのだけど、自分の中に小さな秩序が生まれるまでは、自分を持ってあまり気味で大変ですね。

小室 私はやっぱりお金のことですね。赤字にならないようにとかもそうですが、資金繰りも大変で毎回綱渡り状態なので。まさに目下の課題です。

—やりがいは？

木村 良い作品ができたとき。それに尽きます。2018年に札幌文化芸術劇場hitaruのオープニングシリーズ事業で「ゴドーを待ちながら」を公演させていただいたとき、チケット代4,000円で入場者数2,500人を目標にしていました。チケット収入が1,000万になると資金繰りも楽になりますしね。札幌で「ゴドー」でお客さんを集められるのだろうかという不安もあったけど、結果たくさんの方が来てくれました。創った舞台にも納得でき、観客にも恵まれる、こういう喜びがあるから次につなげていけるのだと思います。

小室 いろいろ苦労しても、多少お客さんが少なかったとしても、良い作品になったと思えたら良かったなってなりますよね。それを違うところに持って行って、いろんな人に見せたいという気持ちでテンションが上がります(笑)。

—札幌だと人手が少ないこともあって、多岐にわたる実務を一人で担う状況もあるわけですが、完全に分業できる環境だったらどの部分を請け負いたいですか？

小室 私は企画の部分が一番やりたいです。

木村 私の仕事はひとつの流れになっているから、どの仕事というのは選べないけど...。守るべき仕事の核というはあるんだと思います。プロデューサーだったらそれが企画立案と経済的な部分だと思うし、制作だったら、チケット販売促進にあるんじゃないかなと思っています。

小室 制作は、創作と並走しながら、安心して創作に専念できるようこちらで心配事を取り除いていくことじゃないかなと私は思っています。そういう環境づくりが仕事の核だと思っています。

—何を仕事の核とするのかについても、人によって違う捉え方がありそうですね。最後にお二人の目指すところを教えてください。

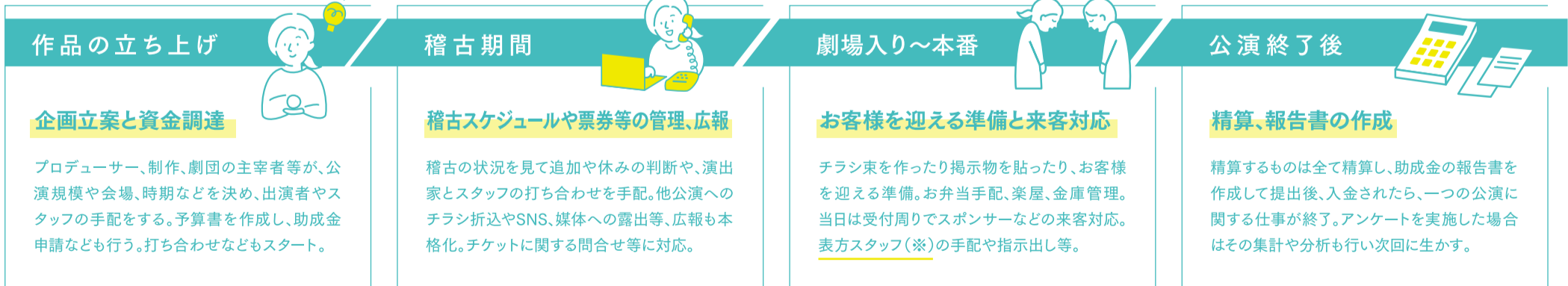
木村 若い世代の人たちが、財団という組織の中で自分たちらしい演劇をつくったり、活動の拠点として札幌の演劇に関わっていけるようにしていくことを、芸術監督の清水と考えているところです。次世代のプロデューサーと一緒に仕事をしながら、次に続くようなことを見つけていけるといいなと思っています。

小室 札幌で演劇を産業化していくことを目的にラボチを立ち上げたので、目標は壮大ですが、ちゃんと演劇で食べていける人が少しでも増えていくといいなと考えながら日々取り組んでいます。

仕事の流れ

演劇作品の創作と上演に必要とされる主な実務をご紹介します。公演によって「プロデューサー」「制作」「票券」「広報」とクレジットされる人たちが分担している一連の仕事です。

※
教文情報誌「楽」46号にて「表方スタッフ」の記事を掲載しています。



公演情報ほか

木村さんが関わる公演情報と、小室さんがプロデュースするのと☆えれきの公演DVDをご紹介します！

札幌座第59回公演 『ひつじが丘』

[日 時] 2023年3月9日(木)～3月12日(日)

札幌と函館を舞台にした三浦綾子「ひつじが丘」を原作に、北海道の文学を北海道の演劇人たちが舞台化。

会場：北海道立道民活動センター かでのホール



のと☆えれき

「葉桜とセレナーデ」DVD発売中

2022年7月に上演したのと☆えれき「葉桜とセレナーデ」の公演DVDをオンラインショップにて販売中です。本編の他、アフタートークダイジェストも収録。11～12月に上演のぶらすのと☆えれき「沼部、陸へ上がる」も年明け販売予定。

ラボチオンラインショップ <https://rabochey.thebase.in/>

